

柳田國男「山宮考」における靈山と神社の捉え方：とくに富士山に注目して

2021/9/11 日本宗教民俗学会9月例会 {配付資料修正版}

由谷 裕哉 (小松短期大学名誉教授・金沢大学客員研究員)

1 報告の趣旨

2020年の拙稿「柳田國男の靈山觀と祖靈論との関わり」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第57号)の続編。前稿では、柳田國男の山岳に関わる言説を時代順に追跡し、およそ「広遠野譚」(1932)辺りから山岳と死者の靈魂との関連付けが始まること、それは『神道と民俗学』(1943)や「山臥と語りもの」(1944)を経て『先祖の話』(1946)に至って祖靈と結びつけられること、しかし『先祖の話』においても、死者の靈魂が時を経て祖靈に融合する仮説と死者の靈が高山に至る仮説とが充分に関連づけられないまま、山頂に祖靈が留まるという方向の議論になっていること、などを明らかにした。

さらに、柳田の靈山觀と祖靈論が専論として議論されるのは『山宮考』(1947)であるが、多くの事例が参照されるので別に検討したい、とも述べていた(同論pp. 91f.)。本プレゼンが、その別の“検討”に相当する。

なお、本発表での「山宮考」とは、1947年6月に小山書店から「新国学談第2冊」の『山宮考』として刊行された柳田の著作(全236頁)のうち、「1 山宮考」と題された部分(pp. 1-122)を指す。末尾頁に「昭和廿一年一月十六日」と付記されている。定本11ではpp. 295-358、新全集16ではpp. 115-174に相当する。因みに小山書店版ではこの1に続いて、2が「おしら神と執り物」、3が「信濃櫻の話」、4が「窓の燈」、となっているが、定本11に2, 3は再録されていない(新全集16には再録)；《←以下、対象とする本テキスト、柳田の年譜(全集別巻1)および『炭焼日記』などは、末尾の参考文献に不記載》

「山宮考」は、全21パートのうち最初の9パート辺りまでが伊勢の内宮外宮神職家の山宮祭祀に関する考察。そのためか、先行研究において、柳田が伊勢信仰を論じた(あるいはそうすべきだった)とする誤読に近い解釈(↓)があったことに対しても、代案を求める必要があると思われる。

中村 哲「祖先崇拜と新国学」1966；...朝廷の祭祀である伊勢神宮には、それぞれ祖先神としての氏神をもつ荒木田、度会などの神官が関係したということ、伊勢神宮の山宮祭には、祖先祭を行った神官は触穢とされ、沐浴を必要としたことに注目している。前者の問題は、伊勢神宮の祭司であるべき天皇家以外のものが祭事に関係しているという点から、天皇家の氏神信仰には血縁以外のものが関係したということ、これは氏神信仰に血縁以外のものが加わったという拡大の論理を追求することであり、また歴史的には、政治国家の祭祀である天皇信仰と土着の氏神信仰がどのような秩序づけを必要としたかということに関係してくる。...；《←途中、発表者が下線を引いた“拡大の論理”や“秩序づけ”などは中村が柳田に探求して欲しかったと考える課題であり、柳田は伊勢の内宮・外宮の祭神については一切問題としていない》

伊藤幹治「柳田國男と文明批評の論理」1972；『山宮考』は民間の氏神信仰と伊勢信仰とが、同一の出自＝系統であることを証明しようと意図したもので、このなかで春秋の二度にわたって、田と山を去来する田の神と山の神が、実は祖靈であり、氏神の根源であるという有名な作業仮説が提起されている。《←引用の発表者による下線部、そのような“意図”は伊藤の思い込みでは？》

因みに、「山宮考」に特化した先行研究ではなく「新国学談」3部作に関わる考察だが、柳田が晩年になって上梓した『炭焼日記』(修道社、1958)のとくに昭和20年(1945)の記述に、それら3

部作の準備勉強となった読書記録が見られるという指摘もなされている（↳内野吾郎[1983]）。

なお、本発表で富士山にとくに注目するのは、「山宮考」立論における陥穽がそこに見られると発表者が考えるからである。

2 「山宮考」の構成と概要

『柳田國男全集』別巻1(2019)の年譜p. 322に、“氏神祭や山宮祭”について考え始めたのを1945年8月21日からとする。『山宮考』刊行は1947年6月10日だが、上記年譜p. 328では起稿を1945年12月29日、脱稿を1946年1月16日とする(p. 328)。極めて短期間で執筆がなされたことになるが、当該年譜ではこの間、1945年9月9日の木曜会（敗戦後初）で「氏神と山宮祭について話す」(p. 323)、および10月14日の木曜会でも「山宮の話」などを講釈する(p. 325)、とある。以上のうち、脱稿以外の年月日については『炭焼日記』の該当箇所に類似記載があるので、同日記が典拠であろう(脱稿年月日は初出本の稿末に付記；cf. 『祭日考』初出本の稿末には「20, 12, 24」とある)；←占領軍の神道指令が1945年12月15日。

ともあれ、「山宮考」全21パートの内およそ1-9が伊勢、10-13が富士山、14-19他事例も含み、山宮-氏神関係を巡る推論へ(含む伊勢について18で再論)、20-21上記推論の補足データ(賀茂、日吉、稲荷+伊勢再々論など)、という構成になっていると考えられる。

1) 伊勢に関わる議論；概要

なお、このセクションのみパワーポイント表示(発表時)より詳しいの記述となる。

1 伊勢の氏神祭

伊勢神職の氏神祭について、『神宮雜例集』巻2と『皇大神宮年中行事』が古い(鎌倉末か室町初期か)。計7つの氏神祭。うち、伝わるのは内宮禰宜の荒木田氏、外宮禰宜の度会氏のみ。その祭日は、度会氏は2月申の日と11月酉の日、他は4月と11月の初申の日。荒木田度会両氏とも2門あり、荒木田は1門2門、度会は2門4門が連綿と続いた。；←したがって、中村哲[1966]は完全な誤読！

大宮司家の氏神祭→宮川の対岸、春日神社。中華風に変化したか。

2 神と氏人との関係

神主姓の者を大神宮の氏人と称。しかし、家筋は主神とは無関係；⇒我が国の神社に氏神とそうでないものがあり、後者は神の後裔でない者によって祭祀。伊勢は後者に相当；由緒の深い従者で、神の信認の厚かった家系に属；←中村哲[1966]の議論が誤りであったこと、再び。

cf. (伊勢と似た例)石清水；紀氏、宇佐～大神氏と宇佐氏に特権。賀茂；小さな境内の氏神社で満足。三輪；奈良の率川(いさがわ)神社をもって大神氏の氏神と主張。伏見稲荷；秦・荷田2ヶ野氏神...；歴代の祖霊を通して主神と自家とが結びつく関係。

↳同様に、伊勢の「二宮」(内宮外宮のことか?)の氏人はその好例。

3 氏神祭場の移転

内宮荒木田氏1門2門の氏神祭は近世に衰え、祭場を宇治近くへ。、『皇大神宮年中行事』に2門は田辺本社(現・度会郡玉城町)に参り、1門は小社(同)・湯田野社(現・伊勢市小俣町)に参る(途中、1門が岩井田山に移した云々)；今の田丸の町周辺に遺跡が⇒遠いので両者とも氏神祭場を宇治へ

田辺の場合ももとは社殿が無かったが、建物のある社に変化した。

4 氏神祭と触穢

外宮度会氏、宮川内側の狭い区域に集住、氏神山宮ともに行きやすい。2門は南にある方、宮崎氏神

社(現・伊勢市岡本町、大国玉比売神社付近か);天牟羅雲命を祭神、4門の氏神祭場は丸山・車塚(田上^{たのへ}大^お水^{みず}社に比定;現・伊勢市藤里町)、第1世と娘親子の霊を2小社に齋くとするが、後年の認定かも。

伊勢の氏神;大宮の職務との間に境目。宮崎氏神社への参詣を廟参と捉え、参宮の当日は忌む;⇒先祖祭に伴う触穢が残る(多田義俊『宮川日記』, 禰宜家の墓・社refer)。祖霊を現世につなぐ云々;⇒山宮と氏神についての作法が残る?

5 二種の精進

服忌(ぶつき)路が、とくに外宮では氏神と山宮との間に。内宮には服忌路が設けられず。度会氏の氏神祭は氏全員の参列が原則(祭場が近かったからか?)。

山宮の方が氏神祭(大宮の神事)より精進が厳しかった。食物禁忌;蒜(ニンニク)+山鳥。

山宮祭の作法、外宮の『年中行事今式』に見える。氏人が参加すべき年を“祭年”といった。

6 特色ある饗膳の式

伊勢の氏神祭の中心点は饗饌。氏神祭と山宮祭に共通するもの~みてぐらの制式、一種の幣帛。

度会氏の祭式に倭舞が、神饌と饗膳が祭の関心の焦点に。山宮祭場に臨時に4, 5の竈を築く。

共同飲食が終わると山宮の祭祀に; 山宮祭の本質か? ;⇒(食別れ)神人別途の饗膳。

7 山宮祭場は葬地か 《内宮荒木田氏の山宮》

荒木田度会両氏の各二つの祭で祭られるのが祖神、二つの祭の地理的關係、あとの3家には氏神祭のみ。

山宮祭の祭日、両氏で完全に違う、荒木田氏3月11日度会氏11月下旬、3月は4月の氏神祭に先立つ、11月は翌2月に結びつく;(←後者はこじつけ?) 祭場;荒木田氏1門2門は氏神祭場より1里水上、外城田村大字積良からさらに山へ、祭場は一箇所でなかった。

その二つ津不良谷と椎尾谷(2門と1門);⇒積良谷(現・度会郡玉城町)の山宮祭場を荒木田氏祖先の墳墓と(『神都名勝誌』)。

8 法楽舎の問題 《つづいて外宮度会氏の山宮について;仏教の介入云々》

対する度会氏、一箇所のみ山宮@滝谷(岩戸山の東斜面)。『年中行事今式』編纂に数十年かかるが、1675に山宮神事の規式を改めた、とある。柳田の憶測;それ以前は祭場が2つあり、片方が仏教にかぶれた、山宮祭を北辰妙見信仰と結びつけた。

↳ 妙見の霊像を感得したのが岡崎宮、最初の山宮祭場との伝、柳田は笑止と。法楽舎(小規模な宮寺)が岡崎宮の妙見信仰に関わっていた。

9 山より降り来る祖神 《仏教介入の件が続く》

外宮では山宮の2祭場を1つにしたが、その理由は仏法の排除、妙見信仰の分離にあった。

幣とみてぐらとの対立、ここでは省略。椎・萱などをあらかじめ運ばせて、仮殿を作る。荒木田氏の山宮祭には雨に妨げられた記載あり。

伊勢の山宮は起源古い、仏教の干渉にも拘わらず、歴代の祖霊を家に迎えて共同飲食する習俗と、氏神の信仰行事との間に橋を架けうる;ほかい棚、精霊棚、年神の棚、みたま棚 etc. と起源が一つ。《一本論の中心テーマだが、本当だろうか?》

(小括; 1-9仮のまとめ+疑問);

1-2 他姓の社家が祭神を祭祀する好例としての、荒木田氏1門2門(内宮)と度会氏2門4門(外宮)。

3 荒木田1門2門は、早くから氏神を宇治岩井田山などへ移動(もとは2門が田^{たのへ}辺<現・度会郡玉城町>、1門が小^お社<同左>、湯田野<現・伊勢市小俣町>;←スライドでは参宮線田丸駅に矢印)。

4 度会氏2門4門は、氏神山宮ともに行きやすい場所に（2門宮崎氏神社、4門田上大水社；共に現・伊勢市）。宮崎氏神社に詣ることを“廟参”と称し参宮に際して忌む；←多田義俊の『宮川日記』に「宮崎御文庫より見ゆる所の丸山」に「禰宜家の祖の墓や社」refer.（“丸山”は、4の前半で度会氏4門の氏神祭場と明記されている；スライドの矢印の先が“宮崎御文庫”の旧地）

5 外宮では山宮と氏神との間に服忌(ぶっき)路が。山宮祭の精進は氏神祭より厳しかった。

6 山宮祭の中心点は共同飲食；《←氏神祭との違いは、祭祀の前に共同飲食、という順序のみ？》

7 荒木田度会両氏の各二つの祭で祭られるのが祖神、祭日はそれぞれ異なる(荒木田氏3月11日、度会氏11月下旬)が、山宮祭が先(前者の氏神祭は4月*)。荒木田氏の山宮@積良谷^{つぶら}に関しては、墳墓とする資料(『神都名勝誌』)がある。《*←『皇大神宮年中行事』は、1門2門の氏神祭を4月初申としている》

8-9 度会氏の山宮は かつて二つ有ったが、氏寺が関与したので片方が排除された。残った一つが岩戸山(不明か)の東斜面、滝谷(不明か)；⇒伊勢の山宮は起源古い、仏教の干渉にも拘わらず、歴代の祖霊を家に迎えて共同飲食する習俗と、氏神の信仰行事との間に橋を架けうる。

↑なお、『炭焼日記』1945年8月20日には、『神宮年中行事大成』により、荒木田、度会二氏の氏神祭、山宮祭のことを知り得たり」云々とある；《←確かに同“大成”に記載がある；発表時まで充分検討できないので割愛》

疑問1；上記6の通り氏神祭と山宮祭との違いが分かりづらい(5で禁忌の違いが言われるものの)。

疑問2；山宮祭をなぜ祖霊祭祀と捉えるのか？；墳墓とする資料があるから？、共同飲食に根拠があるから？ また、祭日が里宮の祭より早いことが祖霊祭祀である根拠となるのか？

2) 富士山に関わる議論；概要

言及される社名に対し、以下における議論の為に仮にノンブル、および現称と現在の所在地名(後に検討するものは**赤字**で)を付記しておく。詳細な検討は3にて。

10 浅間神社の山宮神事；①官幣大社浅間神社(現称・**富士山本宮浅間大社@富士宮市**)

11 祭神推定の弊；②府中の浅間新宮、静岡市の東北にある国幣社(現称・**神部神社浅間神社大歳御祖神社@静岡市**)

12 二処の祭場(甲州の側、以下8社)；

③東八代郡一宮村の国幣小社浅間神社(現称・**浅間神社@笛吹市**)

④河口湖北岸にある県社浅間神社(現称・**浅間くあさま神社@南都留郡富士河口湖町**)

⑤上吉田の県社(現称・北口本宮富士浅間神社@富士吉田市)

⑥小室浅間(現称・富士御室浅間神社@南都留郡富士河口湖町)

⑦河口湖の南岸勝山村の氏神社、富士浅間明神(現称・富士御室浅間神社@南都留郡富士河口湖町)

⑧西八代郡宮原村上門の浅間明神(現称・**一宮浅間神社@西八代郡市川三郷町**)

⑨東八代郡二之宮の美和明神(現称・**美和神社@笛吹市**)

⑩中巨摩郡大井村大字下宮地の三輪明神(現称・**神部神社@南アルプス市**)

13 諸国に残る山宮(以下の2社プラスα3社；←3社は富士山周辺でないのでノンブル付けず)

⑪西八代郡上野村の御崎明神(現称・表門くわと神社@西八代郡市川三郷町)

⑫東八代郡上黒駒の山中にある神座(かみくら)山権現(現称・**檜峰神社@笛吹市**)

(以下プラス3社)延喜式の金桜神社、安房の豊房村の山宮神社、奈良県山辺郡都介野(つげの)村の式内都祁(つげ)水分神社

以上のうち…；

⑤は山宮無しと「山宮考」でわざわざ言及。

⑥と⑦は山宮と里宮のセット、という意味の言及らしい。山宮への神輿渡御は無さそう。

⑨以降は浅間神社ではない。そのうち、⑩は「山宮考」で「山宮があつた」と明記されているものの、『甲斐国志』などで山宮の存在を確認できず。

↳ そこで3での考察は、⑤⑥⑦⑩を除いて行うことに。

3) パート14以降の概要

{これらの部分の扱い、とくに本テーマを論文化する際の扱いには迷っている。富士山、それに次いで伊勢については柳田が参照したと思われる資料類を確認しようとしているが、その他事例については余裕が無いのでとくに、比叡については典拠が分からない模様；伴信友か?。従って、以下は事例に留意せず要点のみ}

- 山宮の事実があつて山宮と呼ばれないのが、山王；15 《←しかし、申の日と山宮祭祀は別日》
- 山から神を迎える作法として、比叡・三輪の例のように植物に迎える；16
- 祖霊は山にあるので(『先祖の話』)、氏神の祭に先立って山宮行事を行う。山宮の神事を持たぬ神社があり、かつ増えてきたのは、氏族の祖でない神を拝む場合が多くなったから；17
- 山の神は田の神でもあり、季節によって交替することがある。その実態は祖霊；18
- 祭の月日は神が冬の間山に鎮まっているという昔の考えから来ていることがあり、山宮と里宮もそれと対応している。常陸、醍醐、近江、対馬などの例；19 (20, 21は割愛)

↑色々突っ込みどころはある。とくに祖霊が山にあるとして、なぜ氏神祭に先立って山宮行事を行う必要があるのか (住谷一彦[1982]pp. 217f. はそこを疑問視；⇒4で再検討)、また山の神と田の神が交替することと山宮里宮の二処祭場論とがどうして対応する(or 同じようなものと考えられている)のか etc.

以下の富士山を巡る議論を検討のうへ、再考することにしたい。

3 富士山を巡る議論の検討

1) 「祭日考」における“浅間神社群”との比較 (←これも、論文化に際してここで触れるか未定)

『祭日考』(小山書店, 1946. 12)所収の冒頭論文が「祭日考」。全21パートのうち、18が「浅間神社群の祭日」。後の「山宮考」と同様、『浅間神社の歴史』を参照することが明記される。以下のノンブルは、「山宮考」のものを流用。

①本宮；都良香の引用などにより、4月と11月の初申の日が例祭。この間に9月15日の大祭が追加。4月11月の前日に山宮神幸、4月11月の前月の未の日に山宮神法があるのに対し、9月には欠落。その他、5月の流鏝馬、御田植え祭など、それらの明治以降の変化など。

②新宮；2月会(彼岸の頃の祭)、3月会(仏式)。山宮と奈古屋社(2つのやや不明な社)を含む、3つか4つの神社が集合していて複雑。大宮と同じく4月11月の初申の祭に山宮も参与(厳重な物忌)、さらに僧尼入るべからずの神事札。5月の流鏝馬や9月15日の大祭には社僧も参列。

③甲斐の国幣社一宮浅間神社；河口浅間神社ともに中世以前からあつた。4月と11月、中の亥の日、有名な三社合同神幸の祭。

④河口浅間神社；いま一つの県社⑤上吉田の浅間神社と共に、4月初申の大祭のみ。

⑦勝山と下吉田；ともに9月19日が流鏝馬の大祭で、4月11月の申祭は無し。

(小括) 後の「山宮考」と選ぶ神社が似ている(下吉田の浅間社は「山宮考」ではほぼ言及無し)。もともと駿河では、上記の後五所浅間、十六御子神、須走、須山も少しだけ言及。山宮については、本宮および新宮について4月と11月の初申の祭が言及されている。初申の日に注目していることが、後に「山宮考」での山王の考察に繋がるのか？

2) 里宮ー山宮の神幸を伴う山宮祭祀について

「山宮考」では、とくに山宮への神幸(神輿渡御)、そこから里宮への還幸に注目していると思われる。また、上記14以降のパート概観で見たように、山宮祭祀と里宮(氏神)の祭との祭日も注目されている(とくにその前後関係について)。

さらに、“祖霊”というからには、山宮および里宮の祭祀担当者についての情報を知りたい(この点は、「山宮考」で意図的に隠されている感もある)。以上を下記表にまとめる。

使用したギリシャ文字が指す資料は、以下の通り； α 『浅間神社の歴史』， β 『国幣小社・神部・浅間・大歳御祖神社誌』， γ 『駿河志料』， δ 『甲斐国志』， ε 『甲斐国一之宮浅間神社誌』(山宮神幸祭は明治以降のデータ、pp.169-175で4月合同例祭の起源考察；←これのみ「山宮考」以降のデータ)

#	山宮へ渡御の月日	渡御後の祭祀	里宮祭との関係	渡御以外の山宮祭祀	山宮の祭祀担当	備考
①	4, 11月の初未	迎え火、饗膳、奉幣、神楽など(含・社僧)、詳細は α のp.135-140	前日(山宮への神輿渡御の無い9月も、大祭礼の前日)	1/1歯堅、1/6山宮神事*、1/8-10大宮司斎籠もり、1/16弓場始、9/14、3月と10月の末の未に山宮小神法(行列で路に小枝を刺す)ほか12月も； α ，pp.117f.，pp.124-128 etc.	山宮太夫；山田氏 α ，p.635.[*「山宮考」で社僧参加ゆえ後世付加と]	山宮の社殿無し、山宮祭神は大山祇命、山宮は元つ宮 α ，p.139ほか《←社僧の4,11月山宮祭祀への参加+山宮太夫の社家の件は、「山宮考」に不記載》
②	4月11月初未に神幸、4月上祭、11月下祭と称 β ，pp.96f.；←“あべこべ”	神饌、法楽、巫女神楽 γ	前日(4月11月の初申の日に大祭)	1/3山宮祭礼、1/16山宮歩射、7/7山宮花供、7/24山宮祭(明治期) β ，pp.91-95	新宮氏， β ，p.50；「山宮考」では両社の神主と	祭神大山祇命、山宮は麓山神社と称、 γ には上祭下祭の件は出ず？
③	3月初午、“山宮御幸”と称 δ ，p.876、3日前の夕方に吉旦舞祭*	神輿から山宮へ遷座、献供、祝詞、撤饌、直会 ε ，pp.163fff.	4月の合同祭(“大御幸”、⑨の一月前 α ，p.870	7月山宮籠もり(7月朔日より7日まで) α ，p.873， δ ，p.876←両書とも詳細記述無し(大祭は11月にもあり)	社家7家、古屋修理ほか δ ，p.877	*吉旦舞祭は渡御3日前に小麻を路に撒く；①の山宮小神法と似るか。11月の“冬御幸”は明治以降に廃 α ，p.873

④	(大祭時に神輿が山宮と反対方向に池を渡る)	—	(大祭は4月初申)	1/17山宮神事、神主の歩射か?、白羽の矢で祈祷 α , p. 904	山神社は高橋氏、本社は宮下氏 α , p. 910	祭神大山祇命 δ 下p. 107、式内論社(他に③と⑧)
⑧	旧暦4/13 δ , 下p. 83	神輿を山宮に遷して神楽云々 δ , 同左	同日(4/13)が本祭らしい、同左	(山祇社<山宮のことか>は旧社地とも。『角川日本地名辞典山梨県』p. 137)	(不明)	山宮を二宮と称、式内論社(③、④と);
⑨	3月初申、尾山村山宮へ神幸 δ , p. 884	—	4月合同例祭(③と)の前月	—	兼帯か?(山宮考)	祭礼は年中75度、明神の神主上野氏はもと応神天皇の皇子の御子坂中井君を源云々、同左
⑩	4月卯日と11月、4月を「西の御幸」と称 ϵ , p. 169、霜月は無言無灯で山宮へ還幸 δ , 下p. 59	1, 2, 3の神事の名が δ 同頁に出るも、詳細不詳。官祭のため武器など給す云々。	4月卯日が「大神事」、4月の後は里神は11月の後山宮に、同左	—	不詳、三輪明神の神主家は今沢氏らしい。	式内社神部神社とされる。11月山宮への還幸の後、神輿が4月まで山宮に留まる資料がある由。『式内社調査報告』vol. 10, p. 539
⑫	(4/8登拝する者多い) δ , p. 879	—	—	—	武藤氏もと中臣氏、同左	祭神は高皇産靈尊

4 考察

◎ 「祭日考」からの繋がり ; (←論文化する際にここで考察するかは未定)

「祭日考」の一般的な理解では、氏神祭が2・4月と11月を古式とすることを、古くは太政官符から明治の『神祇志料』や『特選神名帳』まで使って導いた書、とされてきた(⇒住谷一彦[1982]など)。しかし、8「石清水と北野と祇園」でこの3社のように新しく、かつ仏教の影響を受けた神社の祭を考察し、16「農村の夏祭」で牛頭天王のような防疫神の夏祭りを祖神信仰からの変化と位置づけるなど、話題が多岐に渡っている。

その中で、とくに15「神を山に送る」で、甲州などの霜月祭を神が里宮から山宮へ引き移るものと捉え(その逆が6「靈山と2月の祭」)、祭日を神の山一里の往来日に求めようとする見解が中心だという解釈もある；↓

cf. 原田敏明[1947]；『祭日考』で「祭を二月四月と十一月とする」理由を「山の口開けと口止め、即ち同じ神が冬は山へ帰られて山の神となるとの考え」としていることに対し、「本来民家で行われるべきものが後に神社というところで行われることになった」と解する。それによって、いわゆる同床共殿は畏れ多いということで神社に発展し、民家の方が短期となりいわゆるお旅所となる。お旅所滞在が短く簡略になったので、祭の重点がお旅所から本社へ帰られる時に移行した、などと代案を提起している。

この原田の「祭日考」解釈を是とすれば、「山宮考」が依拠している枠組(例；山の神の里への降臨⇒田の神化、など)は、「祭日考」とも共通するのではないか。実際に、立論において引いている事例も似ている。先に見た“浅間神社群”の他にも、厳島神社と弥彦神社(6靈山と二月の祭；「山宮考」では19祭月と山宮との関係)、大隅の御崎神社(6；「山..」で14靈山信仰の統一)、伏見稲荷(21稲荷社の初午の祭；「山..」21田中社と田宮寺)等など。また「山宮考」20のタイトルになっている賀茂と日吉も、「祭日考」の各所で議論されている。

対して「祭日考」にほとんど無くて「山宮考」で注目されることになったのが、伊勢の氏神祭と山宮祭(伊勢自体は7「二十二社の性質」で1段落referされるも、社家の氏神山宮については言及無し)；《←『炭焼日記』1945年8月9日に萩原龍夫が『大神宮叢書』5冊を背負って運んで来た記述があり、それからしばらく中身を読んだ話が続く。『祭日考』脱稿は12月25日とされるので『大神宮叢書』の内容は認識していたのだろうが、あえてそれに触れなかったということに?》

◎ 伊勢と富士との違い；(←これを一番強調したい)

伊勢に関して、里側で問題にされたのが荒木田氏・度会氏の「氏神祭」であり、『皇大神宮年行事』に明記されていた。つまり、そこで祀られる祭神(天見通命、天牟良雲命)は内宮外宮の神とは異なるもの。対して富士山麓で山宮祭祀の後に行われるのは、全て里宮の大祭+山宮への神幸以外で山宮祭祀を複数回行っている(とくに①②+複数でないかもしれないが③④でも；含む歩射④、①も類似儀礼か)。

さらに、山宮の祭祀担当者が里宮と異なると推察される事例もある(①④)。これらは里宮社家の祖霊祭祀ではありえないだろう；《←「山宮考」ではこの件が隠されているのは、前述の通り。なお、枚寄典子[2003]p.67は柳田の指摘があることを根拠に、①の山宮祭祀を祖霊に関わるものと見なしているが...》

⇒(参考)『祭日考』に関する議論だが、住谷[1982]はp.203, pp.218f.などで、『祭日考』パート1「氏の神を祭る月」後半で寛平7年(895)の太政官符を引用(概要)する最後に、「何廢先祖之常祀」を柳田が「先祖祭は罷めさせるわけには行かぬ」と解釈し、次の2「祖先を神と拝む風習」冒頭で「その氏神といふのが、先祖の常祀であつた」と柳田が位置づけたことに異論を提起している。住谷は、「先祖之常祀」は「先祖の常に祀る」であり、それが祖霊であったかどうかは分からないとしている。

また、伊勢では荒木田度会両氏が氏神祭を行う場所(前者がもと田辺など、後者が宮崎氏社、田上大水社)は、固有名詞に“田”が付くように田の神祭祀と関係があると柳田は解釈していたが、富士に関係する①-⑧は、実際にどうかは別にして柳田は田の神と関係するかどうか全く考察していない(後に田の神信仰が再考される21でも、富士山関係の宗教施設は言及されない)。

加えて、『浅間神社の歴史』p.139では①の山宮を“元つ宮”と位置づけており、⑧もその可能性がある。これらは伊勢の社家の山宮とは明らかに異なる；←神輿渡御を行うということは、そ

うした経緯から里宮のお旅所と考えられているのでは？

◎あるべき比較対象が参照されない；(←ここも、論文化する際に考察するかは未定)

1) 阿蘇神社；大宮司阿蘇家の神話的祖先が祭神・健甕龍(たけいわたつ)命。しかし、阿蘇神社に柳田が考えたような山宮祭祀ー里宮祭礼のセットが存在しない(?)からか、少なくとも「山宮考」で阿蘇は一切参照されない(「祭日考」には15で旧2月の卯祭と11月の紅葉祭が少しだけ言及)；refer ⇒ 村崎真智子『阿蘇神社祭祀の研究』(法政大学出版会, 1993)

2) 日吉大社東本宮の未御供など；卯月の午の日(現在は4月12日)に奥山である八王子山上の牛尾宮と三宮から神輿が担ぎ降ろされ、まず二宮拜殿に安置される。翌日の“未の日”に、上記二基が東本宮・樹下宮の神輿二基と共に、“大政所”と呼ばれる御旅所に移される。昼間、神職たちが四基の神輿に、米・椿の造花・若松などの特殊神饌を捧げ、献茶も。夜、“宵宮落とし”が行われ、若宮の誕生(御生まれ)が表現される。堀河天皇の康和元年(1099)から始まった祭祀とされる；refer ⇒ 景山春樹「日吉社祭祀考」(『神道史研究』13-30, 1965)

↑なぜ、「山宮考」で比叡/日吉が議論される15および20でこの祭礼が触れられないのか、かなり疑問。山宮⇒里宮への神輿渡御はあるものの、先に(柳田があるべきと想定したような)山宮祭祀が無いから？

◎ 山宮祭祀⇒里宮(氏神)の祭り、という前後関係；先にも見たように、住谷一彦[1982]がこの点に異議を呈していた。住谷書p. 217によれば、柳田が山宮行事は「氏神祭祀に先行して行われねばならない」のだが、それだと「賀茂の氏神祭祀が説明できないことを、彼自ら認めている」とする。住谷と同じ引用箇所になるが、柳田は両所賀茂の祭祀を「大切な山中の神事と結び付けようとして居ない」ことを、「私には説明が出来ない」としている(20「賀茂と日吉」)。さらに住谷書p. 218に続くように、柳田は「奈良の春日や越後の弥彦」にも山宮行事が伴わないことを認めている(19「祭月と山宮との関係」)。

柳田が「山宮行事が氏神祭祀に必ず附随していることを前提にした立論」(住谷p. 218)をとるのは、私見で一つには、日本で神を迎えるのが高所から、という1915年の「柱松考」「柱松と子供」辺りから一貫する柳田の考え(←1918年の「神道私見」にも見られることは由谷[2018]参照)に依るであろう。

神を平地の里宮で御祭りする以前に、先づ山頂の清浄なる地に於て、御迎へする形は多くの社に伝はり、又民間の春秋の行事にも残つて居る。正月には松迎へ、盆には盆花採り、いつでも高い処に行つて植物によつて神を迎へるのが常の習ひである。{in 定本11, p.339, 新全集16, p.156}

↑これを是とすれば、富士山周辺のとくに①②③⑧における里宮の神輿を渡御させての山宮祭祀は、何ら説明できない。

さらに、山宮祭祀⇒里宮の祭礼、という時間順について柳田が念頭に置いていた観念は、もう一つあるように思われる。それは、里宮の祭礼は一氏ではなく合同した氏神の祭りだという、(発表者の仮称で)“氏神の合同”仮説である。

例えば、先の概要1-3)で“山宮の神事を持たぬ神社があり、かつ増えてきた”理由を考察したと纏めた17「氏神と山宮行事」。その理由の2番目を、「氏族の祖でない神を拝み禱るべき場合が、次々多くなつて来たこと」(定本11, p. 341, 新全集16, p. 159)とするなど。

続いて、18「山の神は田の神」の末尾近くより。

つまりは後々は家々で同じ神を祭ることになつて居るが、本来は家毎に又は一門毎に、一つ～の神があつたのだといふことが判つて来るのである。是が祖神であり氏の神であり、先祖が子孫の田業を庇護したまふものと信じて居た為かといふ点は私の解説であつて、まだ簡単には人の同意は得られまいと思ふが、本拠が山にあり、働きが専ら家の稲作の成功を期するに在るといふことは、先祖があつた神で無いと、実は想像し得られないことであらう。{in 定本11, p.347, 新全集16, p.164}

このような枠組については、近刊の由谷[forthcoming]で検討を加えている。

以上2点を是としても、「山宮考」17-19のように山の神は田の神であり、11月に山に還るとすれば、11月の山宮祭は里宮の祭礼より後に行わないとおかしいのでは？

11月山宮への神幸が確認できる①②③は、山宮祭祀は里宮の祭礼の前日もしくは前月であり、矛盾する。

11月に里宮祭礼を行うかは不明だが、⑩のみ11月は山宮への“還幸”と明記される。

伊勢について11月はどうだったのか、少なくとも「山宮考」では明確に論証されていない。

⇒1914年の『山島民譚集』を始原とすると考えられる(↳由谷[2020])山の神田の神交替論、伊勢の山宮氏神、富士山周辺の山宮里宮、三者それぞれ異なるのでは？

また、神道指令との関わりも今後の課題に。

《参考文献》；[←プレゼンで触れていなくても、配付資料を作成するうえで参考にしたものを含む。一方、NDLデジタルからダウンロードした資料は掲載していない場合もある。また、サブタイトルを省略した場合がある]

伊藤 幹治「柳田国男と文明批評の論理」、『現代のエスプリ 柳田国男』至文堂, 1972; ⇒伊藤『柳田国男 学問と視点』潮出版社, 1975

——『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店, 2002

井野辺 茂雄『富士の信仰』(原著1928), (復刻)名著出版, 1973

内野 吾郎『新国学論の展開』創林社, 1983

大谷 正幸『図説！富士信仰 古代～近世初期編(改訂版)』富士信仰アーカイブズ, 2021

荻野 裕子「南麓における富士山研究動向」、『富士信仰研究』創刊号, 2000

——「富士講以外の富士塚—静岡県を例として—」、『民具マンスリー』38-10, 2006

——「西からの富士参りと駿府浅間社」、『静岡県民俗学会誌』31・32, 2016

鎌田 純一『甲斐国一之宮浅間神社誌』浅間神社(山梨県東八代郡一宮町一宮), 1979

国幣小社神部神社浅間神社大歳御祖神社社務所(編)『国幣小社神部神社・浅間神社・大歳御祖神社誌』同社務所, 1937

式内社研究会(編)『式内社調査報告』第10巻東海道5, 皇學館大学出版部, 1981

杵寄 典子「富士周辺の山宮祭祀」、『神道宗教』191, 2003

住谷 一彦『日本の意識』岩波書店, 1982

竹内 理三(編)『角川日本地名大辞典19 山梨県』角川書店, 1984

竹谷 靱負『富士山文化』祥伝社(新書), 2013

中村 哲「祖先崇拜と新国学」、『法学志林』64-1, 1966

原田 敏明「書評 『新国学談 祭日考』」、『民族学研究』12-1, 1947

伴 泰『浅間神社正史』延喜式内名神大社浅間神社(南都留郡河口湖町河口鎮座), 1983

- 平野 榮次(編)『富士浅間信仰』雄山閣, 2007(遠藤秀男「富士信仰の成立と村山修験」, 小林一葵「富士修験道」ほか収録)
- 堀内 真「富士に集う心―表口と北口の富士信仰―」, 『中世の風景を読む3 境界と鄙に生きる人々』新人物往来社, 1995
- 「富士信仰研究の動向」, 『山岳修験』31, 2003
- 「村山口を中心とする富士信仰関係資料」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』142, 2008
- 松平 定能『甲斐国志』(原著1814), 翻刻(上下版)甲斐国志編纂会, 1971
- 宮地 直一・廣野三郎(官幣大社浅間神社編)『浅間神社の歴史』古今書院, 1929
- 茂木 貞純「北口本宮富士浅間神社の火祭り」, 『神道宗教』119, 1985
- 山形 隆司『17～19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容』科研費研究成果報告書, 2018
- 山梨県教育会東八代支会(編)『東八代郡誌』(原著1913), (復刻)名著出版, 1979
- 由谷 裕哉「柳田國男「神道私見」における神社観の再検討」, 『神道宗教』250・251, 2018
- 「柳田國男の靈山観と祖靈論との関わり」, 『明治聖徳記念学会紀要』57, 2020
- 「柳田國男の戦時言説としての氏神合同論」, 『日本研究』46, forthcoming
- 渡邊 秀司『扶茲日記』にみる江戸後期の富士山, 『宗教民俗研究』28, 2017